

35. $^{131}\text{I-T}_3$ レジンスポンジ摂取率値の 臨床的検討

石突吉持 満間照典 速水四郎 長谷川晴彦
(名古屋大学日比野内科)

レジンスポンジ摂取率 (RSU) に及ぼす2, 3の臨床的
条件について検索を加えた。

対象には健常例並びに臨床所見, 諸種検索結果から診
断した甲状腺疾患合計 720 例を選び各症例の未治療時血
清について RSU を測定した。

RSU は PBI との間に相関係数 $+0.838$ ($P>0.001$) を
示し, また平衡透析法により得た透析値 (DF) との間に
は相関係数 $+0.942$ ($P<0.001$) を得, RSU が血中甲状
腺ホルモン値を反映する値であることを認めたが, 甲状
腺機能亢進症中10.4%の症例が35%以下の正常 RSU 値
を示し, 単純性甲状腺腫では 24.4% 慢性甲状腺炎では
18.3%の症例が35%以上の高値を示した。

機能正常例の年令的要因をみると, 瀰漫性甲状腺腫に
おける 10 才代の値は平均 29.42% で, 30 才代には平均
32.86% となり, 以後漸減し, 50才代では平均29.02%と
なった。結節性甲状腺腫では 20才代が平均 32.91%であ
ったが, 漸減して 50才代には 28.42%となった。慢性甲
状腺炎中若年例では高値を示す例が散見され, 20才代の
平均値が 33.94% であったが, 以後漸減して 50 才代は
28.97%となり, 60才代には更に減少して平均22.85%と
機能低下症同様の低値を示した。

亜急性甲状腺炎では発症から 1 カ月内例が全例35%以
上の高値を示したが, 1 カ月以上経過例では 35%以下の
RSU 正常値を示した。

妊娠時では機能異常, 正常例ともに妊娠月数の増加に
伴ない RSU は漸減し, 分娩時最低値を示した。分娩後
機能亢進では 2 カ月にして高値を示し10カ月後には異常
高値を示した。

機能正常例の分娩時は PBI が平均 9.6r/dl であったの
に RSU は平均 24.5% であった。1カ月後には PBI が平
均 7.8r/dl と減少したのに反し RSU は 32.7% と増加を
示し, 3カ月後には PBI 7.1r/dl , RSU が 30.6% と逆な
関係がみられ, 6カ月後には27.3%となった。1年後には
PBI 8.2r/dl , RSU 29.3% となり, RSU の安定には分
娩後 1 年を要するものと思われた。

以上 RSU 変化は TBG 変動に基づくものと解される
が, 年令的要因ならびにその他ホルモンの動向を考慮し
ながら RSU 値を判定する要のあることが認められた。

36. TBI-Kit による甲状腺機能検査

木下文雄 前川 全
(都立大久保病院放射線科)

TBI-Kit を用い, 正常者および各種甲状腺疾患の機能
検査を試み, 併せて基礎実験として, incubation 温度,
時間等の及ぼす影響を観察し, また従来広く普及してい
る triosorb test との比較を行なった。

①〔正常者および諸種甲状腺疾患のTBI値〕 正常者67
例, $0.86\sim 1.09(0.95)$, 甲状腺機能亢進症52例, $0.50\sim$
 $0.86(0.70)$, 甲状腺機能低下症2例, $1.11\sim 1.12(1.12)$,
瀰漫性甲状腺腫25例, $0.89\sim 1.05(0.97)$, 結節性甲状腺
腫14例, $0.85\sim 1.11(0.95)$, 悪性甲状腺腫1例, 0.99,
亜急性甲状腺炎2例, $0.63\sim 0.92(0.78)$, 慢性甲状腺炎
9例, $0.88\sim 1.05(0.95)$ 治療した甲状腺機能亢進症 50
例, $0.86\sim 1.13(0.99)$ 。

正常範囲を $0.90\sim 1.10$ にすると, 正常者 67例中 60例
(90%)が正常範囲に, 甲状腺機能亢進症52例は全例0.90
以下, 甲状腺機能低下症 2 例はいずれも 1.10以上, 瀰漫
性甲状腺腫, 25例中22例(88%), 結節性甲状腺腫14例中
10例(72%), 慢性甲状腺炎95例中81例(84%), 治療せる
甲状腺機能亢進症50例中44例(88%)が, それぞれ正常範
囲を示した。

②〔甲状腺機能亢進症の治療(^{131}I)経過観察〕 本検査
により治療後毎月 1 回検査することによりその推移を追
及したが, よく臨床症状と一致し, 治療経過観察, 治癒
判定に有用なことを確認した。

③〔Triosorb 値との比較〕 甲状腺機能亢進症では両
検査とも著しくよく相関したが, 正常者については相関
はみられても亢進症ほどではなく, かなりばらつきがみ
られた。

④〔検査方法の検討〕 (a) 試料 ($^{131}\text{I-T}_3$ 標識レゼン類)
粒) の放射能 100 件についてその放射能の分布をみたが,
SD 2%で, 検査前にその都度測定する必要の少ないこと
を確認した。(b)温度の検討: 15° と 25° で検査を行なった
が, その方法でも正常者と亢進症とは分離され, 診断
可能であったが, 低温の方がもちろん $^{131}\text{I-T}_3$ の血清への
移行が遅れ, 理由はわからないが, TBI 値もやや低値を
示した。(c) 時間の検討: Incubation 時間を 30, 60, 90,
120, 150, 180 分で行なったが, 30 分でも亢進症と正常
者はすでによく分離した。亢進症は $^{131}\text{I-T}_3$ の血清への移
行が, 正常者に比しより速かに飽和に近くなるが, 正常
者では 90~120 分でもなお増加をゆるやかではあるが持